慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	折口信夫におけるライフ・インデックスの考察その一
Sub Title	
Author	星野, 直彦(Hoshino, Naohiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1987
Jtitle	三田國文 No.8 (1987. 12) ,p.1- 8
JaLC DOI	10.14991/002.19871200-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19871200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

折口信夫におけるライフ・インデックスの考察　その一

星野直彦

一

大正十五年の「餓鬼阿弥蘇生譚」において、折口信夫は初めて「ライフ・インデックス（Life-index）」なる語を用いた。

斂葬に当って、かならず体のある一部を抜きとって置いたのが、散葬によらぬ場合の秘法であって、それが Life-index の伝説形式を形づくる一部の原因になったものらしい。

折口は、いったん遊離してしまった霊魂あるいは精霊の復活を妨げるために、その依って来たるべき「身がら」を分散してしまうか、焼いて根絶やしにしてしまう方法があったことを説き、いわゆる蚩尤伝説で、巨人の遺骸を分割してしまうのは、この巨人の復活を妨げるための行為であったとする。従って、小栗判官は土葬であったために、霊魂の復活に不可欠な屍すなわち「身がら」が存在しており、蘇生が可能となった。それに対して、家来共は火葬されたがために蘇生の途を失う結果となったのである。また、小栗の耳も聞かず、口も働かず、現し心もない「餓鬼阿弥」の生活を強いられた理由を、霊魂の帰るべき屍が不揃いであったためだとする。そして、ライフ・インデックスの基本的概念である。特定の人物と或る外在物との間に生ずるきわめて特殊な関係を、霊魂とその依り来たるべき「身がら」との関係とみたのであった。

さて、昭和三年折口は「神様と採物」と題する講義において、「ライフ・インデックス」について注目すべき論考を展開してゆく。(1) 少し長くなるが引用しておこう。

いったい「手草」とは、何かというと、手にとるくさ、手にとる物の意だ。なぜそんなものが起こってきたのか。根本の理由をいうといわゆるタブーで、ものいみのしるしである。ところがタブーとトーテミズムというのは、人間とある点生活状態が平行している人間以外のものである。何かそこに因縁を考えているものである。（中略）トーテミズムは、どこに根拠があるのかというと、われわれ人間の身体にマナ（外来魂）がやってきてくっつく。それが人間の身体にくっついてくるのが普通であるが、仮りの宿りとして他のものにはいることもある。その品物がその人間の部落にとってトーテムというものになる。ともかく特定の植物なら植物に、人間にはいるはずの魂がはいる

ことがあるのだ。その考えがだんだん育ってくると、人間と共通している点があるために特別な関係を生ずることになる。そうなるとライフ・インデキスというものになる。人間の魂の源が他の動植物のなかにはいってくる。その品物をライフ・インデキス（Life-index）という。つまり、英雄とか妖怪とかいうものの生命は、ある特定の動植物のなかにはいっているから、そのもの自身を傷つけてもその魂の預けどころを絶やしてしまわねばならぬと考えた。これはアーリアン民族にいきわたった信仰で、日本にもある。そのもとがしだいに変化してトーテムの考えが出てきたのである。トーテミズムの対象は動植物に限らず、鉱物・空気・風・光線など、いろんなものである。そのものを使うというと、そのものとマナを共通している団体にとっては魔力を出すわけである。（傍点筆者）

右の論考に著しい論理の循環やよじれを指摘することはできるものの、ともかくも「ライフ・インデックス」を「マナ」や「トーテム」と一続きのものとし、この三つの観念を何とか関係付けようと試みていることは明らかである。

折口は「トーテム」を、本来人間に付着すべき「マナ」なる外来魂が、仮の宿り場所として付着した外在物であるとみなし、トーテムを人間と同血族のものとしたり、人間と同祖から分派したものであるとする考え方を否定した。つまり、マナと称する外来魂を紐帯として、人間とトーテムあるいはライフ・インデックスとの間に関連性を見出そうとしたのである。

二

伊藤好英氏が指摘されたように[2]、この論考がJ・Gフレーザーの「民俗における外魂」[3]を下敷にしていたことは明らかである。

フレーザーは、死をもたらすことなしに霊魂が暫時身体を留守にすることができ、霊魂を身体から取り出してどこか気に入ったところに置くことによってその保全を計り、危難の去った時分に再びそれを身体に取り入れることが可能であるとする、きわめて形而下的かつ物質的な生命観・霊魂観が、未開民族の間に存在することを指摘した。フレーザーはこの外魂観念を説明するにあたって数多くの説話を紹介している。ここでそのいくつかを挙げておこう。

。パンチキンと称する魔法使いが、ある王妃を一年以上も幽閉して彼女に結婚を強要するが、一向に応じない。そこへ王妃の息子が救助に現われて、ここに二人はパンチキンの殺害を決意する。王妃はパンチキンに結婚の決心をしたと偽り、彼の生命の秘密を聞き出してしまう。パンチキンが語るには、「ここから何百何千里の彼方に、深い密林に覆われた淋しい国がある。その密林の真中に棕梠の樹が輪になって繁っており、その輪の中央に水のいっぱいに満ちた壺が六つ積み重ねてある。第六番目の壺の下に小さな籠があって、中に一羽の緑色のオウムが入っている。そのオウムの生命に俺の生命はかかっているのだ。」王妃はこれを息子に話すと、彼は万難を排してこのオウムを手に入れる。そして、このオウムの片方の翼をむしり取ると、パンチキンの片腕が落ち、もう一方をむしり取ると残った片腕が落ちてしまった。いよいよ最後にオウムの首を捻じ切ってパンチキンに投げつけると、彼の首も落ちて死んでしまった。（ヒ

ンドゥーの説話[4]

○食人鬼の生命は、ただ一つのレモンの中に存在しているとされている。ある一人の少年が、そのレモンを切りきざむと、食人鬼は皆死んでしまう。(ベンガルの説話[5])

○巨人が虜にした姫君に、「遠い遠いところの湖の中に島があり、その島の上に教会堂がたっており、その教会堂の中の井戸にアヒルが浮んでいる。アヒルの中には卵が一つあって、その卵の中に俺の心臓があるのだ。」と言う。主人公は、このアヒルの卵を発見してこれを潰してしまうと、巨人はたちどころに潰れて死んでしまった。(「身体に心臓のない巨人」——北欧の説話[6])

○兄弟二人の巨人があって、彼らの霊魂を一つの石に封じ込め、二人でその石を投げ合って遊んでいた。するとそこへある女性がやって来て、この石を盗み取ってうち砕いたところ、二人の巨人は、即座に生命を失ってしまった。(イスランドの説話[7])

○昔ある酋長が敵の捕虜となり、敵は彼を溺死させることも焼き殺すこともまた、刺殺することもできない。ところがついに彼の妻がその秘密を洩らしてしまう。彼の頭に赤金のように固い毛が一本あり、彼の生命はこの髪にかかっているというのである。この髪の毛が抜き去られると同時に、その霊は飛び去ってしまう。(スマトラのニアス島の説話[8])

右の説話について、それをB・グールドの「印欧民譚型表(Some types of Indo-European folk-tales)」による分類に照らしてみると、第六番目の「パンチキン或は生命指標型(Punchkin or Life-Index type)」と第七番目の「サムソン型(Samson type)」、いわゆる「ライフ・インデックス型」にそのままあてはまるか、あるいはその類型とみることができる。従って、ある人物の生命なり霊魂が隠匿されている、オウム・レモン・アヒルの卵・石・毛髪等の諸物をライフ・インデックスとみなすことができるだろう。そして、一様にこれらの諸物に加えられた危害が、そのまま生命の危機を招来し、結局は自己の破滅につながってくる。つまり、ライフ・インデックスは常に保全されていなければならないわけで、他者にその秘密を知られてしまうことが、自己の破滅を意味するところから、ライフ・インデックスの秘密を他者に語ることが一種のタブーであったことを、これらの説話は暗示しているものと思われる。

フレーザーは、ライフ・インデックスの語は用いてはいないが、特定の人物と、ある外在物との間に生ずる関係が、「生命の可分性」あるいは「魂の複数性」によって説明される外魂の観念の上に成立するものと考えたのである。フレーザーはさらに、

「身体に心臓のない巨人」という説話は、たぶん人間と彼のトーテムの間にあると想像されている関係への鍵を提供するものと思われる。この説によれば、トーテムとはパンチキンが生命をオウムに託し、ビダザリが魂を黄金の魚に託したように、人がその生命を託する容器にすぎないのである。(9)

と述べ、外魂の観念の延長上にトーテミズムの存在を展望してゆく。

人間がその魂を、あるいはいくつかあるその魂の一つを託して置く容器としてのトーテムに関するこの解釈が正しいとすれば、各成員が少なくとも一もつの魂をいつも自分の身体の外部にあずけておくことと、この外魂の破壊がその持ち主の死をひき起こすことが明確に証明されるようなトーテム民族の発見が期

待されるはずである。(11)

このようにフレーザーは、外魂の観念とトーテミズムとの間にきわめて密接な関連性のあることを示したのである。

三

我々の古代人は、近代に於て考えられた様に、たましひは、肉体内に常住して居るものだとは思って居なかった様である。少なくとも肉体は、たましひの一時的仮りの宿りだと考へて居たのは事実だといへる。(「原始信仰」昭和六年)

……魂の離合はきわめて自由なものと考へられており、一部の魂は肉身に従はないで、去留するものとしとまたさらに、分離した魂が、めいめいある姿を持つこともあると考へていた。(「小栗外伝」大正十五年)

牀・畳などを動かさず、斎み守るのを、旅行者の魂の還り場所を失はぬようにするのだ、と説くのはよいであらうか。旅行者の魂の一部が、家に残っているために、還って来ても、留まった魂と触りて、そこに安住することができるのであった。留守の妻その他の女性も、自身の魂の一部を自由に旅行者につけてやることができた。(「小栗外伝」)

フレーザーの外魂論が折口に多大な影響を及ぼしたことは、右の記述からもまた、彼がしばしば用いた「生御魂」あるいは「遊離魂」などの語の意味内容からしても明らかであろう。しかし、それ以上にライフ・インデックスとトーテムとが近接した観念であるとするフレーザーの論考に、折口が強く心を引かれたであろうことは想像に難くない。

フレーザーの『ゴールデン・バウ』は、一八九〇年(明治二十三年)に初版、一九〇〇年(明治三十三年)に再版、一九一一年(明治四十四年)に決定版第三版、さらに一九二二年(大正十一年)に簡約一巻本が出版される。折口は、大正七年に「穀物の神を殺す行事」と題して『ゴールデン・バウ』の抄訳を試みており、大正十三年には「信太妻の話」において、トーテミズムと外婚に関するフレーザーの学説を引用しているところから、初版から第三版のうちの何れとは特定はできないものの、遅くとも大正の五年から六年頃までには『ゴールデン・バウ』に接する機会があったものと思われる。また、ライフ・インデックスの語については、長谷川政春氏が推定されたように、大正十二年から十三年頃に折口が精読したとされるR・ゴムの『ザ・ハンドブック・オブ・フォークロア』によるものであろう。(12) おそらく、折口は大正の中期から末期に至る数年間に、右の二書によってライフ・インデックスの基本的概念を習得したであろうと推定し得るのである。

さて、ここで前に挙げた「神楽と採物」の記述に立ち帰ってみよう。

折口は、フレーザーの示した未開社会における外魂の観念を念頭に入れつつも、彼自身の力点はむしろ、外在物——人間という外魂の移行とは反対の方向性を持つ「外在物」、すなわち「マナ」の観念へと移行していることがわかる。そして、このマナの観念を中心に据えて、折口は独自のライフ・インデックス論およびトーテミズ

ム論を展開してゆくことになるのである。

四

私はとうてみずむは吾々のまなの信仰と密接しているもの、とするのである。吾々と同一のまなには、動物に宿るものもあり、あるいは鉱物に宿るものもある。そして、吾々と同一のまなが宿る植物なり、動物を使用すれば、呪力が附加すると信じていたのだ。（中略）すなはち、同一のとうてむを有する動物・植物・鉱物なりをたぐさとして振りまはせば、非常な偉力が体内にはいってくると、考へたのである。とうてむは人間以外に、外の物へはいることもあって、この中、日本では、動物の信仰と植物の信仰とが、明らかに分かれてしもうた。日本でも、光線をとうてむに使用した痕跡があるし、また信仰的に、動物や植物がたくさん出てくる。動物の時はつかわしめとなっており、植物の時はたぐさとなっている。これがだんだん変化して、さらに、たくさんのたぐさができた。ここに、植物と人間の祭りとの関係が現れて来る。（「花の話」昭和三年）

マナは、直接人間に来触するものがあるのと同時に、人間以外の動・植物を含む諸物にも宿る。これを自由にすることによって、その物の持つマナが身体に付加されると言う。つまり、折口は間接的なマナの付着法を考えたのである。

右の記述では、「とうてむは人間以外に、外の物へはいることもあって……」とあるように、マナとトーテムの語の混同が見られるものの、マナの付着した外在物こそが、折口の描いたトーテム像である。そして、このトーテムに対する信仰が日本にも存在し、それが明らかに植物トーテムと動物トーテムの型で分化していることを示そうとした。

古代においてある特定の植物が神聖なものとして理解せられ、これを持って呪術を行なうことによって、このマナを有する植物の威力が付与され、それを持つ呪術の実行者に特殊な資格が生ずることになる。

これらの木は、たぐさとしい呪いをする木ということである。たぐさは踊りを踊る時に、手に持つ物で、呪術の力を発揮するものである。ここに、とうてみずむとしての植物に関連したものの俤が見える。（「花の話」昭和三年）

たとえば、榊は神と精霊、神と人間との問答のための植物として考えられる。三河の花祭における榊の働きを分析することによって折口は、榊を「たぐさ」の典型とみたのである。

花祭では、山を見回るという「山見鬼」に続いて「榊鬼」が登場する。その名が示す通りにこの鬼は榊を持っており、これで山見鬼の背を叩くと山見鬼は物を語り出す。それからこの榊を中心にして問答が繰り返されることになる。結局、山見鬼が榊と接触することによってこの問答が成立することになるのである。

折口は、このように宮廷神楽をはじめとして日本の諸芸能に散見するところの「たぐさ」の本質的意味を、マジックを行なうために必要な呪的植物として捉え、そこに植物トーテムの痕跡を見ようとしたのであった。

五

折口は昭和三年の講義「つぎの根本義」で次のように述べてい

る。(13)

口でたましひをあげるのが寿詞である。このたましひをあげるのに、その家々のたましひのあずかりものがある。人類学の語でいうと、それが Life-index で、「魂のかくしてある場所」という意味である。だから人間についてない時は、他のものについている。それが次第に日本の国家意識が盛んになって来ると、それが水又は米になって来る。それが国々によって違う。結局一種のとうてむであろう。日本でもとうてむの形が考えられるとすれば、ここまで到達できると思う。

折口は、ライフ・インデックスを「魂のかくしてある場所」と訳し、これが日本におけるトーテムの原始的形態であるとした上で、『出雲国造神賀詞』に、「白鵠能生御能玩物」と見える「白鵠」が、出雲国造家にとってのライフ・インデックスであったと考えたのである。

出雲国造が新任されると、一年の潔斎を経た後に宮廷に参上して服従を誓う儀式が行なわれた。この際に寿詞が奏上され、同時に様々な「みつぎもの」が献上される。こうした「みつぎもの」なる品々を、見たり、食べたり、触れたりすることで天子にその威力が付与され、逆に出雲国は天子に服従を誓うことになる。この出雲からの「みつぎもの」の中心となるのが「白鵠」なのであった。

以上の論考から二つの問題点が指摘できる。まず、国々のライフ・インデックスが、天子に対する服従のしるしとして献上されるという考えを示した点である。折口がいうようにマナの付着した動植物をもって、ライフ・インデックスあるいはトーテムとするならば、この場合においてマナに相当するのは国々の魂――国魂と考えられる。従って、国魂の籠った諸物もライフ・インデックス、トーテムとして理解せられていたことになろう。しかも、これを「みつぎもの」として献上するわけであるから、自国のライフ・インデックス、トーテムの献上を、国魂献上の一形態と見たのである。前に見たように、自己のライフ・インデックスが他者の自由になれば、それは直ちに自己の破滅を意味することになる。折口は、逆にこれを応用し、自己のライフ・インデックスを他者にゆだねることによって、積極的に服従を誓うという形態に捉え直したのである。これは、おそらく他に例を見ない独自のライフ・インデックス論であるといえよう。

次に、寿詞の奏上すなわち詞章による国魂の献上を考えたことである。つまり、ある特定の形式を持つ詞章の中に、威力ある霊魂の存在を想起し、これを発するという行為によって、その威力が発揮されるという仮説を立てたのである。後年、「日本文学の発生序説」(昭和二十二年)において展開される「詞章のライフ・インデックス論」の発想の根本が、すでにここで示されていることに注目しておきたい。

六

ところで、折口のトーテミズム論は、もう一つの重要なテーマを内包している。

すなはち、此世界の人間に来り宿るたましひは、実は、他の世界に棲息する動植物其他のものに内在しているたましひと同じものであるといふ考へがあった。だから、そのたましひが、人間の体内に這入ると言ふ事は、その常在所である他界の身体が

持つ力、すなはち、動植物の持つ力を享ける事であると考へた。が、これは、更に考へると、そのたましひを持つものを自由にすることができる、といふ意味から出発している様でもある。(「原始信仰」昭和六年)

折口は、マナを所有する動植物トーテムが実は他界身であったと言う。右の記述は、彼のトーテミズム論が他界身の問題へと移行してゆく過程を明らかに示しており、注目に値する。折口は、ここから他界身と現世身との間にマナの往来を想起し、さらに他界身である動植物をはじめとする諸々の物が、ある時期において人間界に出現することや、遠隔の地にマナの保持身が存在するという信仰が次第に派生してくることを論じてゆくのである。

折口は、マナ・トーテムの実体を説き進むにつれて、特に霊魂の所在というものを強く意識するようになってくる。従って、マナ論・トーテミズム論をさらにつきつめて行けば行く程、彼の終生の課題であった、他界身を中心とした異郷意識の研究へと向わざるを得なかったのである。

本稿は、折口信夫の「ライフ・インデックス論」の全体像を把握するための第一歩として、その初期段階における学説をたどることによって、折口が、西洋の学術用語である「ライフ・インデックス」をいかなる概念として捉え、またどのような過程を経て自説の中に組み込んで行ったかを確認する作業が中心となった。最後に、この初期ライフ・インデックス論の要点を整理し、あわせて今後の課題を提示することで、本稿のまとめとしたい。

1本稿で繰り返し述べてきたように、折口はライフ・インデックスを、マナおよびトーテムと連合した観念として把握している

とにかく所謂生命の指標(Life-index)と謂はれているものは、我国の原始信仰に於いては、とうてむであり、同時に外来魂(マナ筆者注)の常在所といふ事になるのである。(「原始信仰」)

マナを保有する外在物——トーテムこそが折口の考えたライフ・インデックスの原初的形態なのである。

2折口が、これら西洋の学術用語を習得するにあたって、ライフ・インデックスに関しては、フレーザーおよびゴムの学説が中心となった。これに対して、マナ・トーテムについては、野村伸一氏が指摘されたように、R・H・コドリントンやE・デュルケームによって展開されたマナ・トーテム理論の影響を多分に受けているものと思われる。(14)

後年折口が展開した「詞章のライフ・インデックス論」に、コドリントンがマナの籠るものの一例としてあげた「ある特定の形式を持つ言葉(certain forms of words)」が何らかの示唆を与えたのではないかと思われる。また、デュルケームのマナ的トーテム論が、特に異郷意識へ向って行く折口トーテミズム論に何らかの影響を与えたのではないかと思われるのである。この点に関して、本稿では触れる余裕がなかったので、稿を改めた上で検討してゆきたいと考えている。

注

1 『折口信夫全集ノート篇第六巻』

2 「折口信夫を解くキーワード」（『国文学』昭和60・1　学燈社）
3 『金技篇』第六十六章
4～11 『金枝篇』第六十五章
12 「折口信夫の読書」（『国文学』昭和60・1　学燈社）
13 『折口信夫全集ノート篇第二巻』
14 「そののちのマナ」（『折口信夫論文作品の研究』昭和59・9　桜楓社）
15 R. H. Codrington 'Religion' "The Melanesians" 1891.